

ALUMNI AND ALUMNAE NEWS NO. 4

令和5年3月に第IV期 教職実践高度化専攻（教職大学院）院生が2年間の学びを終え、教職修士（専門職）の学位記を手にとり、それぞれの道に巣立っていきました。教職大学院では、高知県の課題解決に向け、それぞれの院生が自ら設定した研究課題に沿った研究活動に邁進し、大きな成果を残すことができました。

学校運営コースの**能勢朋典さん**は、「業務改善と併せた組織における目標共有方策の形成—自律する学校組織の構築—」、**横山美佑紀さん**は、「教師の力量を高めるための小学校組織の在り方—効果的なメンター制の在り方を中心として—」について研究し、ICT活用による教員の負担軽減や学校組織の活性化についての学びを深めました。

教育実践コースの**北沢佳祐さん**は、「メタ認知能力を高めるための教師の発問及び教材研究」、**鈴江暢朗さん**は、「数学的な見方・考え方を育成する本質的学習場の構成について」、**中越和奈さん**は、「既習の文法を使い、自分の考えを英語で書く言語活動の研究」、**畠中憲太さん**は、「不登校を未然に防止する学級づくり」、**松山起也さん**は、「主体的・対話的で深い学びにつながる学級づくり—学級の心理的安全性を高める授業の在り方とは—」、**水口 蒔さん**は、「複式学級におけるICTを活用した授業の研究」、**宮崎奈苗さん**は、「考え議論する道徳を目指した協働的な授業研究」について研究し、授業実践を繰り返す中でそれぞれの授業力を高め、更なる学びを獲得しました。

そして特別支援教育コースの**大島励仁さん**は、「高等学校におけるSSTの実践的研究」、**楠瀬陽子さん**は、「LD-SKAIPによるアセスメントに基づいた読み書きが苦手な児童の支援」、**古味 梢さん**は、「特別な支援が必要な生徒に対するチーム支援」、**廣瀬 空さん**は、「小学校における個の学びを保障する学習指導」について研究し、特別支援教育において効果的な方法を探り続けてきました。

それぞれの院生の成果は、各学会発表や学術論文として公表されています。4月から現職派遣院生10名及び附属学校所属院生1名は、置籍校や学校や教育委員会等で勤務し、ストレートマスター修了生2名は、教員や事務職員として活躍しています。ここでは、教育現場の中核的存在になり、即戦力として教育現場で活躍している様子と、教職大学院で自ら学んだ経験を多くの教員への波及効果を目指して、日々奮闘している様子を語ってもらいました。

【学校運営コース】

能勢朋典さん 「学校教育目標と教育活動のつながりに対する教員の認識の強化と進捗管理の追加 いの町立伊野中学校」



4月から在籍校に戻り、教務主任と学年主任をしています。学校教育目標の認知は向上したものの、目標に駆動した日常的教育活動の実施というレベルまでは研究を進めることができませんでした。このため、まず自分自身が校内の取組を、学校経営計画の目標を明示して提案し、それに基づく実施後の効果検証という形をモデルケースとして示しました。それでも取組中、目標に向かっていることの意識が薄まっていくことから、学期毎の総括職員会の様式修正や取組ごとの成果検証の仕組みを設けました。またICTを活用し、こうした進捗管理の業務負担軽減を進めました。仕組みの改修でどのような効果があるのか引き続き研究を進めていきます。

横山美佑紀さん 「教職大学院での学びを現場に～さらなる信頼関係の構築を目指して～ 日高村立日下小学校」



4月より在籍校にもどり、6年学級担任と研究主任をしています。在学中はメンター制に焦点を当て、若年メンターの不安解消や負担軽減に注目し、教員同士が協力し合い学び合う体制について研究しました。本年度は、若年教員が少ないこともあり、学年団がメンターチームとOJTの「橋渡し役」を兼ねる等、組織の実情に合わせた効果的なメンター制の在り方について検討しているところです。今後も、教職大学院での学びを生かし、現場の先生方とさらなる信頼関係を築きながら、メンター制の運用による小学校組織の活性化について検証していきたいと考えています。

学校運営コースより “学校管理職の役割と実践”では、学校経営計画を見直しながら、組織経営の地図の描き方と、その難しさが印象に残っています。また、統計解析についての講義では、事実ベースで物事を考えることの重要性を理解しました。課題を見極めて、確かな根拠をもとに改善策を実施していくことの大切さを、講義を通して勉強することができました。研究では、在籍校での組織化のための方策実施にあたり、現場を混乱させないだろうかと2人で、試行錯誤しながら相談し、「少し変化が出てきた！」と喜びがあったことが良い思い出です。

【教育実践コース】

北沢佳祐さん 「学校業務体験を実施中。あくまでも教員を目指して奮闘中 海南市立中野上小学校」



私は現在、和歌山県の中野上小学校で事務職員をやらせていただいています。これまで続けてきた自分自身の研究とは、やや離れた業務にはなっていますが、もともと興味があった学校業務の裏の様子を体験できる貴重な機会だと思っています。私は、学校事務を経験することで、教員には見せない子ども達の姿も見ることができています。また子ども達だけでなく、外部の方々、保護者や教員との関係性も学ぶことができ、日々貴重な時間を過ごすことができています。教員とは少し異なった場所から子ども達の成長を見守りながら、学校業務の仕事をしなが、引き続き、教員を目指して精進していきます。

鈴江暢朗さん 「数学が面白い！と思う授業をめざして！ 高知市立一宮中学校」



4月から新任校で3年生の学級担任をしております！高知市内で1、2位を争う規模ということもあり、不安を感じていたのも束の間で、素直な子供たちと充実した日々を過ごしています！また、数学科の教員も5名と多く、充実した教科会や互いの授業を見合い、相互研鑽を積むことができています。やはり、学校現場では大学院在学中していたように、教材研究をじっくりとすることは難しい日々ですが、教材の本質をとらえて議論し、よりよい授業を追及できる同志がいることは非常に心強いです。日々の授業に一喜一憂する毎日ですが、大学院の学びを胸に刻み、プライドをもって邁進します！

中越和奈さん 「基礎基本を大切に英語力の向上を目指して 高知県立高知小津高等学校」



今年4月に高知小津高校へ異動となり、1年理数科のホーム担任、進路指導部、弓道部副顧問を担当しています。現在、1年生を中心に全学年の授業を受け持っており、基礎基本の大切さを改めて感じています。在学中の研究を少し発展させ、学年団で共有しながら実践しています。また、引き続き、論文を読んだり、学会に参加したりするなど自己研鑽を重ね、生徒の英語力を向上させるには何が必要かを考え、学年団の先生方と話し合っています。教職大学院での出会いと学びを通して成長することができ、この2年間は大変有意義なものとなりました。本当に感謝しています。この経験を活かし、今後も生徒のために頑張っていきたいと思っています。

畠中憲太さん 「授業のなかで、生徒とのつながりを 佐川町立佐川中学校」



久しぶりに現場に戻り、今年度は3年生の担任となりました。最終学年ということもあり、行事企画や進路指導など、忙しい毎日を送っていますが、それでもやりがいを感じながら日々を過ごしています。教職大学院では主に「肯定的評価」について研究し、その効果的な活用について学んできました。「理論と実践」を意識しながらも、いざ生徒を前にすると上手くいかないことも多々ありますが、それでも教職大学院で学んだ理論が根底としてあるため、粘り強く行えている実感があります。今後も指導力向上を目指し、自分自身をアップデートしていきたいです。

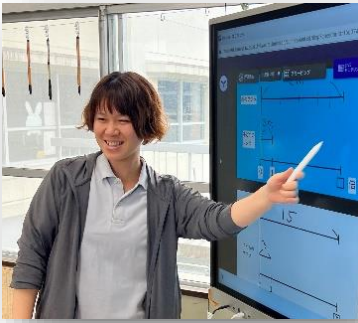
松山起也さん 「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して 高知県教育委員会事務局中部教育事務所」



私は今年度から、中部教育事務所指導主事として主に算数、総合的な学習の時間を担当しています。現在は、学級の心理的安全性の研究に関して、現場で直接自分の実践に生かすことはできませんが、学校支援訪問で授業を参観する機会が多くあります。その際には、その授業が主体的・対話的で深い学びになっているか、また子どもの資質・能力が適切に育成されているかといった視点を持ちつつ、子どもの姿を見ながら担任に寄り添った助言ができるように心掛けています。

これからも、少しでも多くの子ども達や先生方が笑顔になれるよう、精一杯努めていきたいと思っています。

水口 露さん 「ICT を活用することで子どもたちが主体的に学ぶ複式授業を目指して 香南市立吉川小学校」



本校では、第3・4学年複式学級の担任として、ICTを活用することで子どもたちが主体的に学ぶ複式授業を目指し、日々実践を行っています。教職大学院で得られた学びをもとに、思考ツールやコミュニケーションツールとしてICTを活用した授業をデザインし、「アリスモゴン」を教材とした授業や外国語活動における他校との遠隔協働学習を行いました。また、自身の学級で実践するだけでなく、研究主任・情報教育担当という立場から、主体的に学ぶ児童の育成を目指し、学校全体でICTを活用した複式授業の研究を進めさせていただいています。今後も、複式学級におけるICTの効果的な活用方法について実践を通して研究していきたいです。

宮崎奈苗さん 「教職大学院での学びを生かし、先生方と一緒に授業改善を 高知県教育委員会事務局西部教育事務所」



今年度4月より、高知県教育委員会事務局西部教育事務所で勤務しております。「役割取得能力の発達段階に焦点を当てた道徳科授業」や協働的な授業研究法の一つである「道徳科チームミーティング」など、教職大学院で実施した研究や学びを生かして学校の先生方と関わらせていただいています。働く環境が違っても、教職大学院時代と同様、日々の学びを更新していく姿勢を持ち続けなければならないと実感しています。また、私は道徳教育以外の業務にも携わっており、「全ては子供たちのために」という思いで、広く学びを還元していきたいです。

教育実践コースより 正直に言うと入学当初は、「教科をどっぷり勉強するぞっ」という気持ちでした。しかし、それぞれの授業において、教育諸課題について多面的・多角的に考察したり、互いの授業を見合ったり、先生方と議論（決して口論ではない（笑））したりできたことは、教職大学院だからこそできた“学び”の時間でした。そして、私がいうのはなんですが、非常に個性的でキャラの濃い4期生。まさに個が生きた“良いチーム”だからこそできた“学び”だったと実感しています。このような“良いチーム”をそれぞれの職場でも創り上げていきましょう！

【特別支援教育コース】

大島励仁さん 「高等学校における特別支援教育の充実に向けて 高知県立大方高等学校」



在籍校に戻り、主に生徒支援コーディネーターおよび通級指導担当者として高等学校における特別支援教育の実践に携わっています。本年度は特に対象生徒の自己選択と自己決定を重視したSSTの実践に焦点化した実践を行っています。また、他の学校の事例にも携わる機会があり、先生方が試行錯誤しながら様々な生徒の成長に寄与しようと奮闘している様子を見ることができました。今後も教職大学院での学びを広く還元するために自己研鑽を続け、より豊かな学び環境の構築を目指します。

楠瀬陽子さん 「子どもの笑顔や将来につながる支援を目指して 高知県立山田特別支援学校田野分校」



4月からは在籍校に戻り、学級担任と地域支援担当をしています。在院中は、読み書き困難の早期支援の実現に向けて研究を進めてきました。今年度も研究実践校において、LD-SKAIPの結果に基づいた読み書き指導と早期支援までのスケジュール検証に取り組んでいます。適切な学習支援を行うためには、エビデンスに基づいた教育実践が重要であると実感しています。また、効果のあった指導法や教材をGoogle Classroomで校内外の先生に紹介しています。教職大学院で学んだことを広めていくことで、子どもたちに応じた支援の充実を目指していきたいと思ひます。

古味 梢さん 「特別な支援が必要な生徒へのチーム支援を行うために 須崎市立朝ヶ丘中学校」



本年度から須崎市立朝ヶ丘中学校で勤務し、特別支援学級の担任をしています。大学院での授業で訪問した特別支援学校での取組を参考に、個々に合わせた自立活動や授業づくりを行っています。大学院で研究していた、通常学級の中にいる特別な支援が必要な生徒に対する具体的な支援、そしてその支援を共有し「チーム支援」として学校全体へ広げていくことは現在の学校でも必要とされています。自分の担当する音楽の授業の中で支援を実践していくと共に、学年会や支援会・教科間連携など既存のチームを活用して実践を共有・継続するために、必要なことを明らかにするために研究を続けていきます。

廣瀬 空さん 「教職大学院で得た学びを基に試行錯誤を重ねる日々 岐阜市立三里小学校」



私は、岐阜県岐阜市の三里小学校で、5年生の学級担任をしています。慣れないことばかりで忙しい毎日ですが、目の前の子ども一人ひとりの学びの保障に向けて、「その日その時間の子どもの姿を基に実践を振り返り、改善する」といった試行錯誤を重ねる日々を送っています。その中で、特に「背景要因を探る関わり」や「根拠のある指導・支援」といった特別支援教育の視点の重要性を改めて感じています。困った時には、大学院で得た学びや経験がヒントとなって助けてくれることもあります。このように教職大学院での2年間は自分にとっての大きな財産になっています。

特別支援教育コースより さまざまな立場や経験を持つ仲間と共に、同じ課題について議論した経験は、教育観や子どもたちへのアプローチを見直す素晴らしい機会でした。現場に戻ってからの半年は、あっという間でしたが、大学院で一緒に学んだ仲間ならばこの課題にどのように向き合うだろうか？と考える瞬間も多くあり、励まされました。

本教職大学院での研究や実践を通して、これからも互いに刺激を与え合い、成長し続けられる素晴らしい仲間に出会えたことに感謝しています。

【在院生へのメッセージ】

現職修了生より・・・2年間現場を離れ教職大学院で学んだ時間は、これまでの教員生活を振り返り、実践してきた教育活動を理論に基づいて捉えなおすことができたり、先生方や院生の仲間との交流を通して新しい視点を学ぶことができたりするなど、とても有意義な時間になりました。異年齢、異校種の仲間との学びは貴重なものであり、講義の課題や研究に取り組む中で、互いの知識や経験、意見を出し合い、時にはぶつかり合うこともありましたが、視野が広がり物事を多面的に捉えることができるようになったことで学びがさらに深まりました。また迷い立ち止まった時には、共に励まし、支え合いながら乗り越えたこともありました。在院生のみなさん、教職大学院での先生方や院生の仲間とのつながりを大切に学びを通して自身を高めながら研究を深めてください。有意義な大学院生活を送れますように願っています。

ストマス修了生より・・・自分にとって、教職大学院で学んだ2年間はかけがえのない財産となっています。それは、講義や研究での学びだけではなく、院生室等で現職の先生方と交流をした時間を含めてです。教員経験がない自分が、様々な校種、様々な年齢の教育現場でご活躍されている先輩方と交流できた経験は、とても貴重な学びだったと思います。そして教職大学院での先生方との出会いは、現場に出た今でも、授業のことや子どもへの対応等で困った際には、相談させていただくなど、教員1年目の自分にとって、とても心強い存在となっています。このように、あえてストレートマスターとして教職大学院で学ぶ意味もあると自分は思っています。在院生の皆様にとっても、大学院での2年間はかけがえのないものになることを願っています。

Editorial note: 第IV期修了生は、長引く新型コロナ感染状況の影響を受けつつ、熱心に自己研鑽を続けています。修了後は、教員としてだけでなく、人間的にも成熟し、新たな課題に挑戦し精進している様子が伝わってきました。

教職大学院で学んだことを生かしながら、日々の研鑽を通して、高知県だけでなく日本の子どもたちの健やかな成長のために、それぞれの立場での更なる健闘を祈っています。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員

発行日：2023年10月12日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp